無音にのみ打過ぎい大久保近
業れ何ぞ生出有知の遠慮
敬文録自から遠く疎令に
深今勉めて執筆は出来因
山氏並た博文館に入り以来
事務多忙のため到底作なし
但し彼は非常の勉強家なる
近々何か世に出すものなん
となれば板垣君は学課に忙く
殆ど筆を取る暇なし
先日は奴二市地に立寄り
れて定めて十分の状況ありし
ものとなん彼は去る三日香港
に出発せしかば今日は早
メナム河畔に到着せしいか
と彼方なん

メナル所ニ到達セザルベカラズ

と彼宣ヘ

熱帯地方ハ宜ク彼ノ健康

ニ適スルヤウ心ガケシカ

朝日ニ面信を約束ナシ居

多分大以市間談ノ結果と

ハ彼ハ案外苦心ノ精

中人果シテ彼を説み得るか怪

人ハ若シ直信ありし節ハ

万事宜ク市ノ計画ノ程度

のみならず世を利に折合大

久に市ノ為ニ決ス為ニ

ありし他に非ず実目下「戦争」

に在りて政治部を持当ス

しハ知り自業政客の間に

出入するる多く見聞を通

する知ずからず由て世ハ

際一ツの政治演を創作し

以人七の計画あり本案要成

り材料あたかく集まり居

ハ敢えて自ら傑作を作り

以人七の計画あり古案器成
り材料高たかく集まる居
は敢えて自ら傑作を作り
得ざる者中古時代の実況
する処にては純手たる政宮及
び故伯爵の記者は自個を蔵
出する能はず亦た蔵家する
能はず去りとして今日の文士は
殆ど全く政界に出入するの
縁を有せず亦た蔵家の模
倣者なし能たまは幸か
不幸か公平に一個の文士と
して日下の境遇に身を置
くが故に多少只るべき者は作
り得べしと自信居れども
世を知る者少なく有名少ず首
肯し始めざるなり世事の実
情方寸嵐の上生の政治家
も「朝日」に掲載されるを
市民が上下なく市民とはこ
の一体に市民なり これは一方に
於て世日下の境遇 収入を計

の一部に市債に二十は一方に
充て是日本の歳入を計
らねばならぬ事なれば或は
公債より出すべきやも知れず
かたかた其人の市債を仰
公債に市債の歩一方に
成べし
出軍の諸費用金の如き
今後三四日は之を政府等
協議の結果に又た政府費
自由党の形勢も一変代
せんばあるべす此一変化に依
日本の政治歴史一切を劃
するやも知れず所謂陸奥氏
の角逐は一般の運
のよりて来る所の地位より
りて大に注意を著くべき
題目なれば世人の所敬示
なれば此に市債不同意を述べ
ば一つに市債の力強大に
収入を減じ減じ一方に出
市債後一方に収

ば一ツ二ツ市度力物ならず
収二ツ 淋しく笑た 収
二出立後一回はにしし書記
出度はし家は再たにぎやか
にお成り 収二は赤た彼
が最初の姪の出立を知
実に報知達せば定めて
よろこび祝するならん
姪君は唯一の叔父さんのあ
なしら市在知るく毎日毎
夜すやすと眠るが其日課
に市なし
自分帰宅のみ書き立
るに市中伴ちと面白
武蔵野の暁秋今が刻
外物の最後は時節に
浪華近郊の田物如何
最後に一言
ペスト市用心

十月十二日夜

北上

ペスト御用心

北上

十月十日夜

遠く故郷の空
を御慕きつゝ

徳冨

前田侯爵殿

御書翰は報知社宛に頂く

大阪市中島 大阪朝日新
聞社にし
前田勤一郎様

東京青山五番
十一月十六日夜 国木田哲夫